

# 榎野川河口域・干潟自然再生協議会 ニュースレター

発行日：平成 21 年 3 月  
事務局：榎野川河口域・干潟自然再生協議会

## < アマモ場造成、検討・実証事業の取組他 >

アマモ場造成、検討・実証事業は、平成 14 年度から、漁業者や地域の皆様等との協働により取り組んでいます。平成 20 年度も引き続き、地域住民の皆様と協働実施により、6 月 7 日にアマモの学習会と現地での花枝採取を実施し、採取した花枝からアマモの種子を回収しました。その後、回収されたアマモの種は、水産研究センターで保管し、11 月 8 日にガーゼ等にくるんで船上から投入する投げ込みパック法、コロイダルシリカと混ぜる方法で播種（種植）を行いました。



参加者集合写真



コロイダルシリカによる播種準備



船上からのパックの投入

また、干潟保全の一環として、ナルトビエイの駆除が行われています。平成 20 年度は、7 月～10 月にナルトビエイ 157 匹が駆除され、その一部は 9 月 13 日に実施のナルトビエイの試食会で振る舞われました。



ナルトビエイの駆除の様子



駆除されたナルトビエイ



ナルトビエイの試食会

## < 榎野川フォーラムの開催概要 >

榎野川フォーラムが、平成 21 年 2 月 14 日に、阿知須公民館で開催されました。フォーラムでは、基調講演として、NPO 法人海辺つくり研究会理事の木村 尚氏から、『里海づくり・東京湾でのアマモ場再生活動を例にして - 横浜的村興しの勧め - 』、(株)東京久栄技術顧問の柿野 純氏から、『アサリ増殖の考え方と事例』が講演され、アマモやアサリに関する興味深い話を聞くことができました。その後、事務局から榎野川河口域の平成 20 年度の取組状況、住民参加型モニタリングの実施状況、山口湾(南潟)におけるアサリの生息状況、住民参加型アマモ播種作業の実施、カブトガニの生息状況などが報告され、活発な意見交換が行われました。



NPO 法人海辺研 木村 尚氏



(株)東京久栄 柿野 純氏



意見交換の様子

平成 20 年度に開催されました自然再生協議会の概要について紹介します。

### < 第 9 回自然再生協議会の概要：平成 20 年 5 月 3 日 >

「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」の第 9 回目の委員会を 5 月 3 日(土) 山口県水産研究センター内海研究部で開催しました。当日の参加者数は 38 名で一般の方も参加されました。

今回は、第 2 期委員の任期が 3 月末で終了していることから、まず第 3 期委員の選任が行われました。また、団体委員、個人会員については、新たに 2 団体の応募があり、第 2 期委員で既に応募があった委員を含め、すべての方の入会が了承されました。これにより、第 3 期委員は 57 名でスタートすることになりました。また、会長及び会長代理の選任については、会長に中西委員、会長代理に鬼頭委員がそれぞれ選任されました。

次に、平成 19 年度の榎野川河口干潟の再生の取組(干潟モニタリング、アマモ場造成、カブトガニワーキングの取組等)や平成 20 年度のスケジュールについて、説明、質疑等が行われました。

委員会終了後、山口県漁協山口支店で『榎野川の幸を味わう』と題して、山菜の天ぷら、鮎の塩焼き、チヌの味噌汁、混ぜご飯が振る舞われ、干潟耕耘前に、おいしい料理をいただきました。



協議会の様子



食事会の様子

資料の公開方法  
協議会で公開された資料及び議事要旨等については、榎野川河口域・干潟自然再生協議会のホームページ (<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/fushino/index.html>) で公開しています。  
ご意見・ご質問等の問い合わせは、事務局(山口県環境生活部自然保護課)に電話、FAX、メールでご連絡ください。  
TEL 083-933-3060、FAX 083-933-3069、E-mail a15600@pref.yamaguchi.lg.jp



**<平成 20 年度の榎野川干潟再生の取組とその状況>**

榎野川における良好な河口干潟生態系の生物指標のうち、代表的なものはアサリやカブトガニ、アマモ場であり、これらの生息・生育環境の再生を目指しています。平成 20 年度は、中潟では拡大実証試験区（平成 17 年度実施）のモニタリングを継続して実施、南潟では平成 19 年度の成果を踏まえ、地域住民参加型の干潟再生へ向けての実証試験及びモニタリングを実施しました。

なお、平成 20 年度の新たな試みとして、地域住民の皆様には、中潟や南潟でのモニタリングに参加していただきました。



**【中潟での干潟再生の取組】**

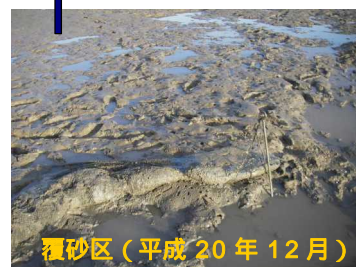
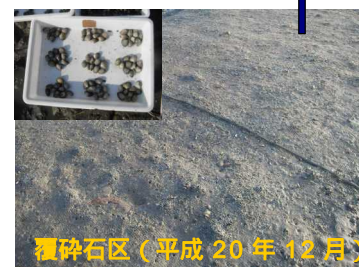
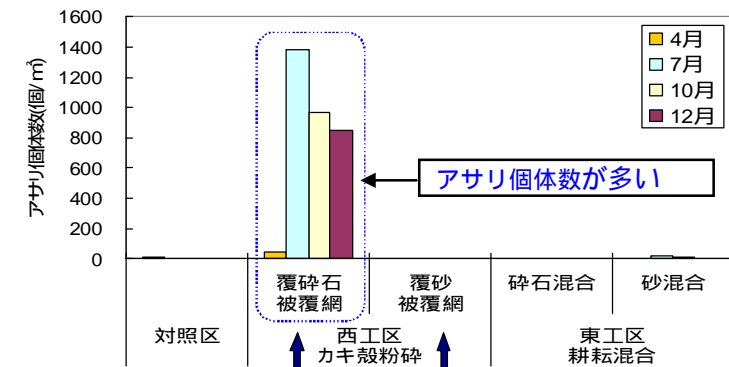
**モニタリング結果の概要**

これまでのモニタリングの結果から、砕石や砂を混合、覆砂することによって、低い泥分が維持され、生物の多様化、アサリ等の砂浜生物の着底が確認されるようになりました。また、砕石や砂を覆砂した試験区では、夏季（7 月）には 20 mm 以上のアサリが多く確認されるようになりましたが、その後秋季（10 月）までに大幅に減少していました。このため、平成 19 年 12 月にアサリの個体数が増加した西工区の覆砂区と覆砕石区に被覆網を設置し、ナルトビエイやカニ等の食害生物からアサリの保護を行うことにしました。今回は、施工後から約 3 年が経過した平成 20 年度の結果を示します。



**被覆網の設置状況とアサリの変化**

覆砂区に設置した被覆網は、泥に覆われてしまい、アサリはほとんど確認されませんでした。一方、覆砕石区に設置した被覆網は、一部泥がかぶったところもみられますが、設置状況は比較的良好であり、10 月には 30 mm 以上のアサリが確認されるようになりました。



モニタリングに参加して頂いた山口大学の関根先生と学生

**【南潟での干潟再生の取組】**

**実証試験の概要**

平成 20 年度は、19 年度に実施した被覆網の成果が良好であったことから、低コストで被覆網の拡大を目指すため、山口県漁協山口支店から使わなくなった魚網（15 mm 目合）を提供して頂いて被覆網として設置しました。

**<平成 20 年度 南潟での干潟再生内容>**

作業項目	作業内容	規模	回数
干潟耕耘	うね（平行）耕耘	90m x 50m	2 回 / 年 （春、秋）
		45m x 50m	
被覆網の設置	被覆網（15 mm 目合）を設置（耕耘区、対照区）	3m x 30m	1 回 / 年 （春）
アサリの間引き	被覆網（9 mm 目合）下のアサリ間引き（耕耘区、対照区）	5m x 10m	1 回 / 年 （秋）

**実証試験（春季：5 月）**

春の実証試験には、約 130 名の参加がありました。耕耘作業の後に、被覆網（15 mm 目合）の設置や干潟観察会を行いました。



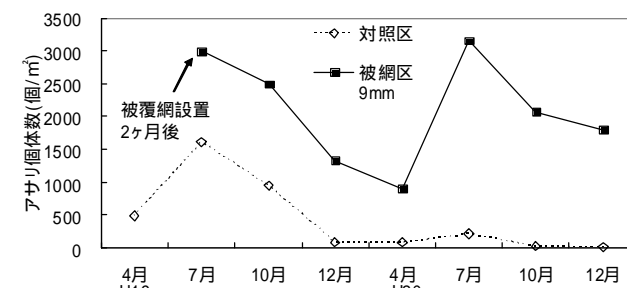
**実証試験（秋季：9 月）**

秋の実証試験には、約 80 名の参加がありました。耕耘後に、平成 19 年度に設置した被覆網（9 mm 目合）下のアサリが大きくなり過密状態になったため、アサリの間引き作業を行いました。間引いたアサリは、新しく設置した被覆網（15 mm 目合）の下へ放流しました。残念ながら、アサリは産卵時期のため、禁漁時期で持ち帰ることは出来ませんでした。今年の春には榎野川河口干潟産のアサリが食べられることが期待されます。

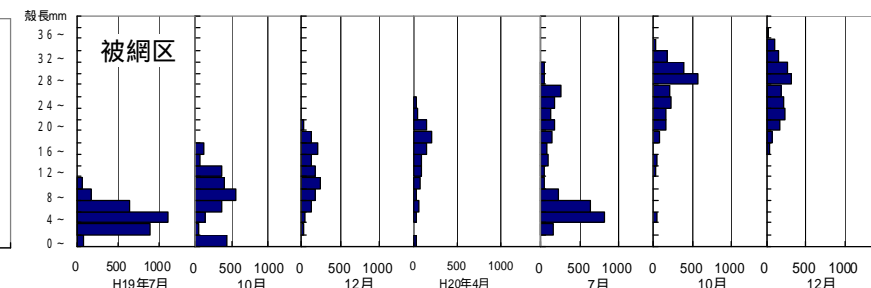


**モニタリング結果の概要**

被覆網を設置した平成 19 年 4 月～平成 20 年 12 月までのアサリの個体数や殻長の変化を示します。平成 19 年 4 月に設置した被覆網（9 mm 目合）の下では、対照区と比較して、アサリの個体数が多く、平成 20 年 10 月には 30 mm 以上の個体が 600 個 / m<sup>2</sup> 確認されるようになりました。これは、被覆網の設置により、アサリの食害防止、逸散防止・集積効果等があらわれたものと考えられます。



アサリ個体数の変化（被覆網区、対照区）



アサリ殻長の変化（被覆網区）

**<カブトガニワーキンググループの取組>**

山口湾のカブトガニ産卵場、生息場の保全を図るため、カブトガニワーキンググループ（原田直宏グループリーダー）を中心に取り組んでいます。平成 20 年度は、8 月 2 日に調査方法の研修会を開催し、30 日には 33 人の参加者でカブトガニ幼生の生息状況を把握するため「ラインセンサス法」を用いた調査を行いました。今年も、平成 18 年度、19 年度に引き続き、このような広範囲での調査は 3 年目となります。その結果、長浜では 265 個体、南潟では 28 個体が確認され、平成 19 年度と比較して長浜ではやや少ない結果になりました。今後とも希少種のカブトガニを保全していくため、データを蓄積していく予定です。

